

番外編 大阪の福島にて

彼氏

彼女

少年

おばちゃん

女

大阪、日本橋、国立文楽劇場の前。売れないユーチューバー、カレカノチャンネル（正式名称は彼氏彼女チャンネル）の二人が撮影（収録）をしようとしている。五月の頭、ゴールデンウィークの初日。もう日差しがきつい。

彼氏「ヒアリに噛まれてみたってどうかな」

彼女「いいんじゃない」

彼氏「あーでも炎上するか。ヒアリだけに」

彼女「焼けちゃうから」

彼氏「ヒアリだけに？」

彼女「日に焼けるから」

彼氏「あっごめん、回すね（カメラ回す。3, 2, 1）彼氏で一す」

彼女「彼女です」

彼氏「カレカノチャンネルをご覧の皆さん、こんにちは」

彼氏彼女「彼氏彼女です」

彼氏「えー本日はカレカノチャンネル番外編として、なんと大阪に来ています。えーここはどこでしょう。（カメラを上部の看板に向けて）じゃーん、国立文楽劇場です。文楽って知ってる？」

彼女「人形劇でしょ」

彼氏「まあ、一言で言ったらそうなんだけど、文楽っていうのは人形遣いと三味線と太夫（たゆう）、太夫っていうのは語りね。この、三位一体の芸術なんですよ、あんま興味ないでしょ」

彼女「なくはないけど、大阪って言ったらもっと他にあるじゃん、たこ焼きとか、通天閣とか、あ、あべのハルカス行きたい」

彼氏「グルメロケは後のお楽しみということで。（チラシを見せ）今日はこの『心中天の網島（しんじゅうてんのあみじま）』っていう文楽を見てきます。近松門左衛門は日本のシェイクスピアと呼ばれてて」

彼女「あべのハルカスは？」

彼氏「あべのハルカスはあれだよ。では行ってきまーす（手を振る）以上、彼氏彼女でしたー（カメラ終了）」

彼女「ねえ、もっと若者向けなとこ行こうよ。てゆうか私をアホみたいにしなないでよ。ネットの情報でしょ」

彼氏「ごめん、でもみんな知らないからさ（入り口を指差し）行こ」

文楽劇場へ入場。

終演後、出てきて。

彼氏「（カメラ回す。3,2,1）いやー、良い席だった。良い席だったね。だってこう、目の前にさ、人形って三人で動かすんだね」

彼女「なんで泣いてたの？」

彼氏「だって最後さ、二人が別々に死ぬんだよ。互いを思い合ってさ」

彼女「てゆうか、死ぬ必要あった？」

彼氏「え？」

彼女「だって、彼氏がしっかりしてたらさ、死ぬ必要なかったじゃん。あんなクズみたいな貧乏人の男じゃなくて、もっとしっかりしたお金持ちのお侍さんだったら、幸せになれたじゃん」

彼氏「それはそうだけど」

彼女「でも一番可哀想なのは奥さんと子供だよ、残されて」

彼氏「きっと、死ぬ以外なかったんだよ」

彼女「はあ？ 男に努力が足りないだけじゃん。もっと言うところまで好きじゃなかったんだよ、あの、小春のこと」

彼氏「好きだよっ」

彼女「……」

彼氏「いずれにせよそんなハッピーな話、誰も惹かれないでしょ。報われぬ恋とか、叶わぬ結婚とか、そういう悲劇にさ、人は惹かれるんだよ」

彼女「私はハッピーな話の方が好きだけどな。だって救われないなんて苦しいじゃない。なんで惹かれるの？」

彼氏「さあ、自分より最低な奴を探してるんじゃない」

彼女「最低な奴？」

彼氏「うん」

彼女「だったら、そいつが一番最低じゃない」

彼氏「え、あ、そうね……あ、え一次はですね、福島というところに『占い商店街』という面白い商店街があるそうなので、行ってみたいと思います。以上、彼氏彼女でした」

福島聖天通商店街、占い館の前。

彼氏「(カメラ回す。3, 2, 1) いやーたこ焼き美味しかったですね。堂島ロールもお得に買えました。えー占いなんですけど、撮影がNGということで、また後でご報告します。以上、彼氏彼女でした」

彼女占い館から出てくる。後ろから彼氏。

彼氏「ちょ、ちょっと待ってよ」

彼女「ついてこないで」

福島区、下福島公園。ここはプールやジョギングコースなどがある巨大な公園である。区の花に指定されている野田藤も栽培されている。

先に行く彼女、後ろに彼氏。

彼氏「ごめん」

彼女「もういいから」

公園のベンチ、頭上に藤棚がある。少年がベンチで寝ている。おばちゃんが座っている。彼女ベンチに座る。彼氏も少し離れて座る。

沈黙。

おばちゃん「先週まできれかったけど、すぐやね」

おばちゃん「あちこちに咲いとるからどこですかーゆうて」

おばちゃん「阪神野田のところはまだ咲いてるやろか」

おばちゃん「早めに切ったらんと来年咲かへんからね」

彼氏彼女「何」

彼氏「何がですか？」

おばちゃん「吉野の桜、高雄の紅葉、野田の藤ゆうて関西の三大名所。知らんの？野田藤、福島の花や。どこから来たん？そんな荷物持って」

彼氏「東京です」

おばちゃん「学生さん？」

彼氏「いえ、まあ、そうです」

おばちゃん「ええ身分やね」

彼女「この人フリーターです」

彼氏「あ、ユーチューブって多分ご存じないと思うんですけど、そこで活動してます。まだまだですけど」

おばちゃん「えっ、ユーチューバーなん？」

彼氏「えっ、知ってるんですか」

おばちゃん「もちろん。HIKAKINとかヒカルとかマックス村井とか見とるよ。他にもたくさん。うちは下品なのが好きやね。どんな企画なん？」

彼氏「ああ、僕というか僕らは彼氏彼女チャンネルっていうチャンネルで」

おばちゃん「（スマホを取り出し）見たるわ、なにになに……彼氏彼女でプリクラ撮ってみた。遊園地行ってみた。普通やん、普通のカップルやん」

彼氏「いや、でも熱めのお風呂に入ってみたとか、ちょっと贅沢してみたとか」

おばちゃん「仲良いんやな、羨ましいわ」

彼女「そんなことないです。さっきもお金節約してロールケーキの切れ端買ったり、たこ焼き1個ずつだったり。占いしてきたんですけど、あの、買っても占い商店街で。そしたら二人の恋愛運が最悪で、でもこの人のせいなんです。働かないし、将来のことも全然考えないし」

少年「（うなされたように）淀川大橋、船津橋、上船津（かみふなつ）橋、堂島大橋、田蓑（たみの）橋……淀川大橋、船津橋、上船津橋、堂島大橋、田蓑橋……」

彼氏「大丈夫かな」

おばちゃん「（顔を見て）大変、この子顔真っ赤やで」

彼女「冷やす物、早く」

彼氏「あっ、どうすれば良い？」

彼女「タオル冷やしてきて」

彼氏「タオルは？」

彼女「（首に）かけてるでしょ」

彼氏「（水道へ）」

彼女「（ペットボトルを取り出し）大丈夫？飲んで」

彼氏「(戻ってくる、あたふた)」

おばちゃん「何つったとんねん(タオルを取り少年の首を冷やす)もう日差しきついか
らな。下手したら死んどったで。念のためその病院行こか」

彼氏彼女、少年を起き上がらせる。

少年「堂島大橋に行かなきゃ」

彼女「病院行ってからね」

少年「彼女が待ってる」

おばちゃん「おーやるやん」

彼女「じゃあ連絡しよっか、あれならお姉さんがするよ」

少年「……」

おばちゃん「堂島大橋ゆうたら、すぐそこやろ。あれやったらおばちゃんが連れてきたん
で」

彼女「彼女見たいだけでしょ」

おばちゃん「ちゃうよ」

彼女「彼女が好きなんだね」

少年「(頷く)」

彼女「羨ましいな」

彼氏「なんだよそれ」

少年「福島だよ、ここ」

おばちゃん「せや」

少年「福島だよ、ここ」

おばちゃん「せや、福島や」

少年「彼女が待ってる」

彼氏「またそれかよ。この子、警察に引き渡した方がいいんじゃない？服も汚れてるし、
もしかして家出少年かも。家に帰れない理由でもあるの？パパとママと喧嘩した？」

少年「家出じゃないもん」

少年、スマホを取り出し、ツイッターの画面を見せる。

彼女「ツイッター？」

少年「(頷く)」

彼女「『福島の橋で待っています』福島の橋で待っています？」

少年「うん」

彼氏「(スマホを見て)4月のツイートじゃん。これ誰？お友達？同級生？」

少年「わからない」
彼氏「わからないって。え、わからないの？」
少年「わからない」
彼氏「pink51さん？」
少年「うん」
彼氏「橋ってどこの橋？」
少年「五つある」
彼氏「いやだから」
少年「ぐるぐるしてたら会える」
彼氏「（彼女に）この子おかしいよ。言ってることめちゃくちゃだし、告ってもないのに彼女だなんて。立派なストーカーじゃん」
彼女「弟子にしたら？」
おばちゃん「一番弟子やな」
彼氏「あ……」
彼女「これが最後のツイート？」
少年「うん」
彼女「pink51、ピンクが好きなのかな」
少年「そうだと思う」
彼女「51ってなんででしょうね？」
おばちゃん「五月一日生まれ、おお、今日や。もしくはイチローの背番号やな」
彼女「そうですね（笑）」
彼氏「ねえ、もしかして探そうとかしてないよね、彼女」
彼女「悪い？」
彼氏「顔も名前もわかんないんだよ。いるかどうかもわかんないじゃん。釣りかもしれないし」
少年「本当にいるもん」
おばちゃん「『君の名は。』やな」
彼女「えっ見たの？おばちゃん」
おばちゃん「見てへん、でもすれ違い続けて最後には会うんやろ、君の名は言うて」
彼女「見てるじゃないですか」
彼氏「アニメではうまくいくさ、アニメでは。でも、こんなことは言いたくはないけど、福島と言ったら東北の福島だろ。福島って言われたら、誰もが思い浮かべるのは東北の福島だよ。あの震災があった」
おばちゃん「でも、ここの、うちに言わせたらここが福島や」
彼氏「いえ、別に大阪の福島の人々を蔑ろにするつもりはないんです。ただ可能性が高い方を選ぶべきだと言ってるんです。今の時代『福島の橋で待っている』と言われたら、東

北の福島を選ぶのが普通でしょ。そっちの方が確率が高いから。それを大阪の福島に行くなんて、なんというか、こういう言い方はあれだけど、ひねくれてるよ、君は」

彼女「ひねくれてるのはどっちだよ、この子にしてみたら、何も変わらないじゃない。それに、東北の福島なら橋の数は数え切れないでしょ。確率でもさして変わらないわ」

彼氏「変わるよ」

彼女「変わらない」

彼氏「変わるよ」

彼女「別れる」

おばちゃん「（彼氏彼女に）もうやめ、（少年に）他になんか情報はないんか？ メッセージとか」

少年「（首を振る）」

おばちゃん「写真とか何が好きとか何をしてたとか？」

少年「お話だけ」

彼女「お話？」

少年「（頷く）」

彼女「お話、見ていい？」

少年「（頷く）」

彼女「（遡ってツイートを見る）すごい、たくさん」

少年「うん、毎日」

彼女「素敵なお話ばかり」

少年「うん」

彼女「私も飛んでみたい」

少年「（頷く）」

彼女「……バッテリーある？カメラの」

彼氏「ああ、あるよ」

彼女「パソコンも？」

彼氏「うん」

彼女「放送するよ、生放送」

彼氏「えっ、何言ってんの？」

彼女「ネットで情報呼びかけるの。pink51さんの耳にも入るかもしれない」

おばちゃん「おもしろなってきたで」

彼氏「え、ちょっと待ってよ。京都は？ 楽しみにしてたじゃない？」

彼女「最後の放送にしたい？」

彼氏「あ、まず、何をすればいい？」

彼女「これから生放送やりますってことと、今までの経緯をうちのツイッターでつぶやいて。で、影響力のある人に拡散させるの」

彼氏「拡散ってフォロワー300だよ」
おばちゃん「おばちゃんの出番やな。(スマホ画面を見せて) ほれ」
彼女「おばチャンネル、嘘でしょ。あの、おばちゃん? ジャスティンビーバーとも共演した」
おばちゃん「(鞆からマスクを出し) いつもは虎のマスクしとるからな。HIKAKINやはじめしゃちょーにも拡散してもらおうわ、おばチャンネルならイチコロや」
彼女「ありがとうございます」
彼氏「準備できたよ」
彼女「じゃあ、生放送いける? おばちゃんも拡散お願いします」
おばちゃん「任せとき」
彼氏「(カメラ回す。3, 2, 1) 彼氏です」
彼女「彼女です」
彼氏「カレカノチャンネルをご覧の皆さん、こんにちは」
彼氏彼女「彼氏彼女です」
彼氏「えー今大阪の下福島公園にいます。えー今日はですね、緊急に」
彼女「皆さんに聞いて欲しいことがあります。この男の子が彼女を探しています。でも名前も顔もわかりません。情報は福島の橋で待っているってことと、pink51っていうアカウント名しかありません。私たちのツイッターのリンクも貼っておきます。なんでも構いません、情報をお願いします」
彼氏「ヤバ、視聴者数、3万超えたよ、まだまだ伸びてる。コメントもすごいよ。『協力する』『がんばれー少年』『福島県でも見てるぞー』だって。あ『少年、なんでその子が好きになったの?』だって。みんな気になってるよ」
少年「そ、それは……」
おばちゃん「なんやゆうてみ」
少年「つぶやきみてて、それで……」
彼女「それで?」
少年「眠れなくて……牛さんを数えてたとき、あのツイッターを見つけたんだ。バッタの兄弟の話、白いへびの話、恐竜と戦うお話、近くにいる気がした。気づいたら朝になってる。でも思ったの、この人はどうやって寝てるのかなって。もしかしたらひとりぼっちなんじゃないかって。だから今度は僕がお話をしたいって思ったんだ」
おばちゃん「なんやねん、今告ってどうするんや。まだおうてないやろ」
彼氏「(笑) こっちも盛り上がってます。『全米が泣いた』『俺の横でも寝てくれー』って。あれ、これなんて読むっけ?」
彼女「ん? 蜷川? 蜷川を探せ?」
おばちゃん「蜷川、蜷川ゆうたらここら辺を流れとった川やで」
彼女「流れとった?」

おばちゃん「せや、100年くらい前、キタの大火ゆう大火事があつてな、一面、焼け野原になつたらしい。そんな時の瓦礫を蜷川に捨てたんや。そんで蜷川は埋め立てられてしもうた」

彼氏「蜷川ってなんか聞き覚えない？」

おばちゃん「ほら、あれや、近松の曾根崎心中とか心中天網島にも出てくる川や」

彼氏「文楽だよ、ほら今日見た。二人がたくさん橋を越えて死に場所に向かう。その時に流れる川だ」

彼女「埋め立てと一緒に無くなった橋もありますよね」

おばちゃん「そりゃあ、そうやろな」

彼女「あんな文章書く人なら、無くなった橋の上で待っていても不思議じゃない」

彼氏「うん」

おばちゃん「不思議やろ、どう考えても」

彼氏「(鞆を漁って) こいつの出番が来た」

彼女「あ、出た、五万したやつ」

おばちゃん「なんやそのメガネ」

彼氏「VRゴーグルと呼んでください。ボク、体は平気？」

少年「うん、もう平気」

彼氏「じゃあ江戸時代の福島にタイムトリップだ」

少年「(頷く)」

おばちゃん「なんや急展開やな」

彼氏、少年にVRセットを装着する。

おばちゃん「あんたがつけたらええやん」

彼氏「子供用なんです。ヤフオクで売らなくてよかった」

おばちゃん「古い地図でええやん」

彼氏「それは禁句です。ボク、怖くない？」

少年「うん」

彼氏「よし、じゃあ失われた橋を探す旅に出発だ」

彼女「(手を繋ぐ) 大丈夫だよ」

彼氏「では、展開」

江戸時代の福島へ。

少年「おー」

おばちゃん「なんや、反応が薄いな」

彼女「何か見える？」

少年「紫色のお花。ここまで伸びてる」
おばちゃん「野田藤か、江戸時代は今の季節も咲いてたんやな」
彼氏「他には？」
少年「田んぼ」
彼女「田んぼ？」
少年「うん、ずーっと田んぼだよ」
彼氏「どんな田んぼ？」
少年「これくらいの高さで、緑色」
彼氏「僕らの姿は見えてる？」
少年「うん、服は違うけど」
彼氏「変換機能だね、どう違うの？」
少年「お姫様、汚い人」
おばちゃん「うちは？」
少年「変わらない」
おばちゃん「（服を見る）何でやろ」
少年「わっ、蜂だ」

少年、VRの蜂を払うように野田藤からちょっと逃げる。

彼女「大丈夫？ いないよ」
少年「あ、あっちに家がある」
おばちゃん「おっ、川もあるかもしれんで」
彼女「そのお家の方に行ける？」
少年「うん」

下福島公園を抜けて横断歩道を渡る。

おばちゃん「気いつけや」

堂島大橋の前へ。

少年「あ、橋、川もあるよ」
彼女「どこ？」
少年「そこ」
おばちゃん「堂島大橋の前やな」
少年「誰もいない？」

彼女「うん、残念だけど。ここに蜷川が流れてるの？」

少年「うん、ここからあっちに流れてる」

彼氏「そっか、じゃあ、あのガソリンスタンドと、いわき病院の間くらいかな」

彼女「そうだね」

横断歩道を渡り、行こうとする。

おばちゃん「うちはここまでや。いつ彼女が来るかわからんやろ。堂島大橋で待っとくわ。

なんかあったら連絡するしな」

彼女「ありがとうございます。私たちも連絡します」

少年「おばさん、このメガネで、藤のお花見て」

おばちゃん「うちは顔でかいからな。もう暗くなるから行き」

少年「ありがとう」

お互い手を振り合う。少年は蜷川に行く。彼氏彼女は路地に行く。

彼氏「不思議だね、普通の道なのに、この子には川が見えてる」

彼女「そうかな、そんなに不思議かな。（少年に）何かいる？」

少年「よく見えない」

彼女「蜷はいるかな。えい（水をかける）」

少年「冷たいよ、えい（水をかける）」

彼女「もーやめてよ」

少年「あっ、お魚」

彼女「どこ？」

少年「おじさんの足元」

彼氏「ざばーん（水をすくう）」

少年「やめろよ、逃げちゃうじゃんか」

彼氏「ざばーん（水をすくう）」

少年「あ、橋だ、橋だ」

彼女「えっ、どこ？どこ」

少年「そっちにお寺ある？その前」

少年を先頭に走る三人。誰もいない。

彼女「行こ」

彼氏「ねえ、川の大きさってこれくらい？」

少年「うん」

彼氏「（川を飛び越える）ほっ、よっ、とお……」

彼女「何してんの？」

彼氏「どう？少年」

少年「落ちてるよ」

彼氏「笑ったでしょ、今」

少年「笑ってないもん」

彼氏「おじさんにもお話してよ、彼女だと思って」

少年「やだ」

彼女「おじさんは川を歩いてるうちに桃になって割られました」

少年「面白い」

彼氏「もー勝手に殺すなよ」

彼氏「そういえば同級生が亡くなったって話したじゃん。あれ、震災で死んだって言ったけど、本当は自殺なんだよ、震災の前日に死んだんだ」

彼氏「（タイ料理屋を見て）あ、モアイ。見て、すごい名前」

彼女「やめなさいよ」

少年「何？」

彼女「こっちの話」

彼氏「（ボクシングジムを見て。動きつけて）ボクシングやりたいな」

彼女「私も」

彼氏「君はやめたほうがいいよ」

彼氏「（道路の反対側を指し）何あれ？」

彼氏、彼女、少年、道路の反対側へ。

彼女「逆櫓（さかろ）の松だって」

彼氏「ふーん」

彼氏「（カフェウインブルドンを見て。動きつけて）錦織」

彼女「もーそれしか知らないでしょ」

道路の反対側、不自然な位置で女がこちらに背中を向けて立っている。

彼氏「あ」

少年「あ」

繋いだ手を解き、走る少年。VRゴーグルはつけたまま。

彼女「車、危ないよ！」

少年には蜷川に架かる浄正橋に女が立っているように見えている。

少年「あの」

女「誰？」

少年「あ」

女「なに？」

少年「あ」

女「（スマホがなり、耳に当てる）うん、着いた。ABCホール？ ううん、全然待つてへんよ、来てくれてありがとう。あ、うちからも見えた（笑顔で手を振る）。もうやめて、恥ずかしいわ。うん、うちも好きやで（退場）」

少年「（VRゴーグルを外す。辺りを見渡す。『浄正橋跡』の石碑を叩く）うわー」

彼女「（近づいて）いやな女だったね」

彼氏「あの人は悪くないでしょ」

彼女「いやな女だった。いやな女だった……（背中をさする）」

少年「福島に行けばよかった。福島に行けばよかった。おじさんが言ったみたいに僕がひねくれてた。僕が間違ってた……」

彼女「何も間違っていないよ、だって福島じゃない。何も間違っていないよ」

彼氏「（スマホを見て彼女に見せる）見て、おばちゃん。堂島大橋なう」

彼女「何これ。めっちゃ男引き連れてんじゃん、てゆうか虎のマスクしてるし」

彼氏「下にスクロールしてみ」

彼女「え、嘘、橋がいっぱい。淀川大橋警備中、船津橋なう、上船津橋で待つ、田蓑橋なう……ツイッターが橋で溢れてる」

彼氏「コメントもやばいよ『東北の福島の橋にいます』『己斐橋（こいばし）にいます。広島は福島の福島です』」

彼女「ねえ、みんな君の彼女を待っていてるよ」

少年「……気持ち悪い。本当に気持ち悪い」

彼女「え？ 大丈夫？」

少年「そうじゃなくて嘘ついて」
彼女「嘘じゃないよ、（スマホを見せて）ほら」
少年「絶対来ないのに嘘ついて」
彼女「来るよ、来るかもしれないじゃない」
少年「本当に来るって思った？ この人たちもそう思ってるの？」
彼女「少なくとも私はそう思ってたよ、思ってるよ。もちろんお祭り気分の人もあるかもしれないけど」
少年「これ返すよ（VRゴーグルを返す）。みんなに見られて、彼女が一番嫌がるのに。本当だけが希望なのに」
彼氏「ボクだって来るって信じてたから、熱中症になっても橋をぐるぐるしたし。彼女のおかげで眠れたんでしょ？ 本当じゃない」
少年「僕はただ、あそこで寝てただけだもん。彼女なんてはじめてからいなかった」
彼女「嘘」
少年「本当、全部僕が作った作り話だもん」
彼女「ツイッターは？」
少年「ツイッターは……」
彼女「本当でしょ？」
少年「でも見えないと意味ないよ、体がないと」
彼氏「さっき、ちょっとだけだったけど楽しかったじゃん、水遊びしてさ、よかったらおじさんのとこ遊びに来る？ 東京、狭いお家だけど」
少年「おじさんたちはいいね」
彼氏「よくないよ、いや、いいよ」
少年「ほら、いいんじゃない、僕たちは幽霊だから」
彼氏「幽霊？ なんかの代表みたいに言うなよ、さっきから、おい、バカ、一人の問題だろ、子供だからって無垢でピュアだなんて思っていないからな」
少年「バカって言うなよバカ」
彼氏「なんだよ、バカ」
少年「バカ、バカバカ」
彼女「ちょっとやめなさいよ」
彼氏「こいつが世界を知ってる少年みたいな顔してきたから、キモいと思っただけだよ」
少年「こんな世界なら死んだほうがマシだ」
彼氏「ほら、とってつけたようなセリフだ」
少年「あの人形の話みたいに」
彼氏「飛び降りてみろよ、橋なんてないぜ」
少年「車にぶつかってやる」

少年、道路に出ようとする。激しく取っ組み合う二人。

彼女「やめなさいよ、二人とも」

彼氏「大人の力をなめるなよ、こら」

少年「ここはどこだ？」

彼氏「福島だよ、バカ」

少年「ここはどこだ？」

彼氏「福島だよ」

少年「おじさんには負けない」

彼氏「そんな悲劇で終われると思うなよ」

少年「希望なんてない」

彼女「（道路の方を向いて）嘘」

彼氏、少年、同じ方向を見る。

彼氏「あっ」

少年「あっ」

（了）